The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Swinburne の世界観とその詩学について
Author(s)	上村, 盛人
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 1975, 8, p. 27-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47732
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Swinburne の世界観とその詩学について

上　村　盛　人

Algernon Charles Swinburne (1837—1909) はヴィクトリア朝時代には、Tennyson, Browning に次ぐ大きな星であった。彼の詩は現在あまり読まれることはないが、それは T. S. Eliot の批判以後、詩に対する人々の感受性が変化したことが挙げられるだろうし、また Swinburne の書いた夥しい数の詩の中には minor poems もかなりあったからであろう。しかし、Swinburne はギリシア、ラテンをはじめイタリア、フランスの言語、文学に通暁し、英文学についても確かな見識を持つ当代一流の批評家でもあった。彼はラファエル前派から審美主義の思想を学び、いわゆる *l' art pour l' art* の英国における紹介者として中心的な役割を果し、さらに世紀末の decadence にも大きな影響を与えた。(1)

Swinburne における *l' art pour l' art* とはどのようなものであったのか。それはその言葉から一般的に考えられるように、醜い人間の世界を pessimistic な態度で眺め、現実離れのした優雅な世界に遊ぶ「芸術のための芸術」であったのだろうか。小論では、Swinburne の詩に見られる彼の世界観、芸術観、および詩の原理を考察してみたいと思う。

I

Swinburne の詩の中で、人間は、政治的に、宗教的に、そして精神的にさまざまな抑圧の下に苦しめられてきたものとして描かれている。人類に救いをもたらすために現れたキリストに対しても、詩人は、「あなたの出現によって地上での圧制は少なくなったのでしょうか」と問いかけるのであ

る。

Hast thou fed full men's starved-out souls?
Hast thou brought freedom upon earth?
Or are there less oppressions done
In this wild world under the sun?[2]

「時」という強大な流れの中で、無力な人間はただ悲惨な存在であり、強力な「時」は神をも忘却の彼方へ流し去るのである。

Ye are Gods, and behold, ye shall die, and the waves
be upon you at last.
In the darkness of time, in the deeps of the years,
in the changes of things,
Ye shall sleep as a slain man sleeps, and the world
shall forget you for kings.[3]

そして、未来の人間も過去の人々がそうであったように「悲しげに立ち、我々が今見ているのと同じ野原や空や海を見る」のである。

Men will stand saddening as we stood,
Watch the same fields and skies as we
And the same sea.[4]

人間はこの世に生れ、しばらくの間生きて、やがて死ぬのであるが、自然はそういう人間に無関心である。これは人間にとって悲しい事実である。

Swinburne の考え方によれば、キリスト教の神も異教の神々もすべて、人間が考え、話し、歌うことを知った後に、人間によって想像され、信仰の対象とされたものであった。[5] 人々が畏怖し、崇拝してきたすべての神々は、この詩人にとっては偽りの擬い物であった。新しい神を信仰の対象とする宗教が確立すると同時に、'thou shalt not' 式の抑圧的な禁制が敷かれ、それに伴って、個人の主体的意志を抑制する社会慣習や道徳律が徐々に打ち立てられ、人々はそういうものに盲従するのみであると詩人は考えるのである。これは、個人の内なる魂、或いは直感的想像力を尊重する Swinburne にとっては耐えられぬことであった。

この点に関して、Swinburne は、そのような社会の圧制的諸相に対する攻撃的告発者としての Marquis de Sade にかなりの共感を覚えていた。shocking な程に grotesque で erotic な小説、*Juliette* において、Sade は宗教的信仰の圧制と危険性について女子修道院長 Delbēne に次のように語らせている。

> 'Once men have as it were got their teeth into the imaginary objects religion proposes, they develop passionate enthusiasms for these objects: they come to believe that these ghosts flitting about in their heads really do exist, and from there on there's no checking them. Every day, fresh occasion to tremble and more adepts quaking: such are the sole effects the perilous idea of God produces in us. This idea alone is responsible for the most withering and appaling ills in the life of man;'tis this idea that constrains him to deprive himself of life's most delectable pleasures, terrified as he is at all times lest he displease this disgusting fruit of his delirious imagination.(6)

Mario Praz が Sade の独創性について言うように、「すべてのものは善で、すべてのものは神のなせる業である」ということが Sade にあっては、「すべてのものは悪であり、すべてのものは悪魔(Satan)のなせる業である」ことになる。(7)

Swinburne は、彼の作品中最も人口に膾炙した劇詩、*Atalanta in Calydon* の神学が Sade に発するものであると述べている(8)が、実際、この作品には、ギリシア神話のストーリーを追いながらも、神への絶対的服従を説く Althaea と個人の自由意志を強く主張する息子の Meleager の対比が鮮やかに描かれている。

> MELEAGER:
> Things gained are gone, but great things done endure.
> ALTHAEA:
> Child, if a man serve law through all his life
> And with his whole heart worship, him all gods
> Praise; . . . .(9)

神話の結末がそうであるように、Meleager はその誕生と同時に課せられた運命に従って悲劇的な最後を遂げるのであるが、それでもその神話の枠組の中で、Swinburne は Meleager をかなり反抗的な若者として描き、chorus の中に次のような大胆な詩句さえ挿入している。

> The supreme evil, God.
>
> . . . . . .
>
> All we are against thee, against thee, O God most high.[10]

神に対するこの姿勢はとりも直さず Sade のそれと同じものであると言えよう。

Sade を個人の主体性を重視する実存的文学者と見做す Gilbert Lely は次のように述べている。

> Nous conclurons de la sorte: Sade contre Dieu, c'est Sade contre la monarchie absolue, Sade contre Robespierre, Sade contre Napoléon, c'est Sade contre tout ce qui constitue de prēs ou de loin une mainmise, de quelque nature qu'elle puisse etre, sur la toison éclairante de la subjectivité de l'homme.[11]

Swinburne は Sade を 'a sort of burlesque Prometheus' であるとし、'You are only a very serious Simeon Stylites——in an inverted posture' と呼びかけている。[12] つまり彼は、専制的な教会に反抗し、主体的個人の自由な sex の解放を極度にまで追求する Sade を、人類に光明の火をもたらした Prometheus に喩え、又、高い柱の上で難行苦行をしたと伝えられる5世紀のシリアの隠者 Simeon Stylites に喩えるのである。勿論これらの喩えには、Swinburne 一流の諧謔が含まれているにせよ、彼があのヴィクトリア朝時代に、Sade のそのような特徴を見出し、それに共感していたことは注目に値すると言えよう。

II

Swinburne はキリスト教の神をも含めすべての神々にも消長があり、強力で無情な「時」の流れの中で、古い神は滅び、新しい神が勢力を得、そ

の神もさらにより新しい神にとって代られる運命にあると考えるのである。そして彼は、「時間」とか「日」という概念が人間によって考え出される以前の太古の時代から未来永劫にわたって「一つの法則」が支配していると歌う。

In the days when time was not, in the time when days
were none,
Ere sorrows had life to lot, ere earth gave thanks
for the sun,
Ere man in his darkness waking adored what the soul
in him could,
And the manifold God of his making was manifest evil
and good,
One law from the dim beginning abode and abides in
the end,
In sight of him sorrowing and sinning with none but
his faith for friend.[13]

この「一つの法則」とは一体何であろうか。Swinburne はそれを「運命」という言葉で言い換えている。

Fate, that was born ere spirit and flesh were made,
The fire that fills man's life with light and shade;
The power beyond all godhead which puts on
All forms of multitudinous unison,
A raiment of eternal change inwrought
With shapes and hues more subtly spun than thought,
Where all things old bear fruit of all things new
And one deep chord throbs all the music through,
The chord of change unchanging, shadow and light
Inseparable as reverberate day from night;
Fate, that of all things save the soul of man
Is lord and God since body and soul began;[14]

「運命」は霊と肉の分離以前からあって、人間によって考え出されたすべ

ての神を超越するものであり、それは「変化という不変の調べ」なのである。Lafcadio Hearn の言うように、Swinburne は、「人や神々や宇宙そのものよりも大きな力、生や死を支配し、永劫に変化し続け、人が愚かにも不変であると思っているあらゆるものを流し去るある測り難い力」[15]の存在を信じていた。

このように、Swinburne の世界観、或いは歴史観は極めてマクロ的なのであり、彼は人類の、もっと正確に言えば、生命の曙とも言うべき遙かなる太古の時代に思いを馳せ、それから永々と続き、これからも続いてゆくであろう「生命の火」とでも言うべきものに我々の注意を向けるのである。ここには紛れもなく、ヴィクトリア朝の価値観に重大な影響を与えた Darwinism の影響が見られる。

Though sore be my burden
　And more than ye know,
And my growth have no guerdon
　But only to grow,
Yet I fail not of growing for lightnings above me
　　or deathworms below.[16]

上にその一部を引用した "Hertha" は当時の進化論的思想を最もよく表しているものとして有名である。しかし Swinburne は、Tennyson のように人類が時と共に進歩してゆくものであるとは考えていないようである。Swinburne が「法則」と呼び、「運命」と言い、Hearn が「測り難い力」と名付けているものは、親から子へと未来永劫にわたって生命の火を受け渡していくことにかかわるある種の生物学的な生命の推進力のようなものであろうと思われる。この力は、太古の昔、地球に最初の生命が現れると同時に発生し、今日まで永々と続いてきたのである。それ故に、それは、人間や神々よりもはるかに古く、偉大なものであり、又、それは個々の生命には誕生と死という変化を与えるが種としての生命そのものは変ることなく永続させることができる故に「変化という不変の調べ」なのである。

Swinburne は、時には、生命を持っているとは考えられない風や夜のとばりや夜明けの中に、そのような秘密の生命力の存在を認める。下に引用された詩の中で、その力は‘Pan’と呼びかけられている。

But in all things evil and fearful that fear may scan,
As in all things good, as in all things fair that fall,
We know thee present and latent, the lord of man;
In the murmuring of doves, in the clamouring of winds that call
And wolves that howl for their prey; in the midnight's pall,
In the naked and nymph-like feet of the dawn, O Pan,
And in each life living, O thou the God who art all.(17)

「時」は、変わることも、間違うこともなく確実に存在し続け、その中をほんのわずかの間だけ生きる人間は、彼をとりまくさまざまな情況に応じてその人生が幸福であるとか、悲惨であるとか思うだけである。しかし、この世界を動かしている秘密の法則は、善でも悪でもなく、人間には全く無頓着で、人間を歯牙にもかけないのである。

How should the law that knows not soon or late,
For whom no time nor space is — how should fate,
That is not good nor evil, wise nor mad,
Nor just nor unjust, neither glad nor sad —
How should the one thing that hath being, the one
That moves not as the stars move or the sun
Or any shadow or shape that lives or dies
In likeness of dead earth or living skies,
But its own darkness and its proper light
Clothe it with other names than day or night,
And its own soul of strength and spirit of breath
Feed it with other powers than life or death —
How should it turn from its great way to give
Man that must die a clearer space to live?(18)

III

しかし、強力な「時」の中で全く無力な存在である人間にも、そのような「法則」や「運命」に対抗し得るものがあるとSwinburneは言う。それは人間の「魂」、或いは「精神」である。これは「生命の最も奥深い炎によってのみ燃やされて」いて、「すべての生物の泉であり源」なのである。

Nor haply may not hope, with heart more clear,
Burn deathward, and the doubtful soul take cheer,
Seeing through the channelled darkness yearn a star
Whose eyebeams are not as the morning's are,
Transient, and subjugate of lordlier light,
But all unconquerable by noon or night,
Being kindled only of life's own inmost fire,
Truth, stablished and made sure by strong desire.
Fountain of all things living, source and seed,
Force that perforce transfigures dream to deed.(19)

「魂」はすべての人の中に宿っているのであるが、必ずしも皆がその存在に気づいているとは限らないし、又、研鑽と努力によって自己の内にある「魂」に働きかけるとは限らないのである。そのような人々は、強大な「時」の中で植物的な生を無力に生きるだけなのである。Swinburneにとって、この「魂」こそまさに真の神と呼ぶに値いするものであり、彼はしばしば、それを太陽と詩の神Apolloのイメージで描いている。

Swinburneは、ギリシアの女流詩人、Sapphoを完全な「魂」を有する理想的人物と見做していた。芸術と詩とSapphoについて情熱的に歌い上げている難解な詩、"On the Cliffs"の中で、彼は、SapphoとApolloとnightingaleを不滅の芸術的精神を持つものとして三位一体化している。彼のSappho崇拝は、彼女が最古の叙情詩人で、そのLesbos島での情熱的な伝説と共に彼女の詩の断片が、強力な「時」の流れにも屈せずに伝えら

れてきたからであり、実際に彼女のギリシア語の詩を読んで感激することができる驚きからであったと思われる。この点でも Swinburne がヘレニストであることは明らかであるが、前述したように、歴史を「変化という不変の調べ」と見る歴史観も、歴史を cyclical なものと見る古代ギリシアの歴史観と同じものであろう。

Sappho の肉体は、昔、Leucadia の海で滅んだけれども、彼女の歌は永遠の生命力を持つ故に今だに我々を感動させる。それは彼女が Apollo に選ばれた巫女として永遠の炎を持つ「魂」で歌ったからであると詩人は言う。[20] Sappho の想像力は「二重の想像力」であった。つまり、彼女は、「耳や目の感覚の中に内在する精神」でものを聞いたり見たりし、「魂のさらに奥にある魂」で歌ったからである。

> . . . we retain
> A memory mastering pleasure and all pain,
> A spirit within the sense of ear and eye,
> A soul behind the soul, . . .[21]

Swinburne にとって詩人とは、神と人間との間をとりもつ予言者的、巫女的存在で、神の超絶的な言葉を解釈して、それを芸術の形に変形して一般の人々に伝える機能を果たす者であった。つまり、Apollo の神の発する神秘的で曖昧な message を翻訳し、伝えるのが詩人なのである。M. B. Raymond が指摘するように、Swinburne にとって詩とは、特に高度な抒情詩とは、何か説明しがたい神秘的な性質を持つものでなければならなかった。[22] Swinburne 自身は次のように述べている。

> The artist must be content to know and to accept the knowledge that ideal beauty lies beyond the most beautiful forms and ideal perfection beyond the most perfect words that art can imbue with life or inflame with colours; an excellence that expression can never realise, that possession can never destroy.[23]

つまり、常にまぶしく輝いている太陽 (Apollo) をじっと見つめることがで

きないように、理想的な美も長くはっきりとその姿を見定めつづけることができないのである。これは不可知論ではなく、詩の神秘性を言っているのである。この故に、Swinburne には、相対立し、時には曖昧に思える状況——例えば、男性的要素と女性的要素が一つの体の中で互いを押えつけようと相争いつつ融合している神話的な Hermaphroditus, 闇と光が対立しながらも徐々に明るくなってゆく暁の微妙な瞬間等——を歌った詩が多く見られるのであるが、今はこの問題にはこれ以上触れない。

一瞬にして過ぎ去る神秘的でおぼろな理想的な美をできるだけ的確に捕えて表現するのに、Swinburne は「想像力の二重性」('twofold vision') を強調する。

> To him [Blake] the veil of outer things seemed always to tremble with some breath behind it: seemed at times to be rent in sunder with clamour and sudden lightning. All the void of earth and air seemed to quiver with the passage of sentient wings and palpitate under the pressure of conscious feet. . . . About his path and about his bed, around his ears and under his eyes, an infinite play of spiritual life seethed and swarmed or shone and sang. . . . Even upon earth his vision was "twofold always;" singleness of vision he scorned and feared as the sign of mechanical intellect, of talent that walks while the soul sleeps, with the mere activity of a blind somnambulism.(24)

この Blake の想像力についての言葉はそのまま Swinburne についてもあてはめることができるように思われる。つまり、Swinburne は Blake 程に神秘的ではないにせよ、彼が Blake の想像力について書く時、自分の詩作態度を思い浮かべてかなりの共感をこめて書いたのではなかろうか。とまれ、この「二重の想像力」とは、五感を研ぎ澄ませ、精神を極度の緊張状態に置く時、五官が感じる以上のものを感知できる状態に達する作用をいうのであろう。この作用には、「魂」、つまり Swinburne にとって唯一の神とも言うべき Apollo が大きな役割を果たす。Swinburne にとっては、

「神は人間であり、人間は神」なのであり、さらに詳しく言えば、「神が人間の堕落せざる（'unfallen'）部分であり、人間は神の堕落せる（'fallen'）部分であるので、神は、（人間以上のものではないにせよ確かに）人間の諸性質（'qualities'）以上のものでなければならない」のであり、彼は'man's intrinsic divinity and God's intrinsic humanity'を主張するのである。[25]

従って「二重の想像力」とは'divinity'と'humanity'とから成る想像力の二重性をいうのであろう。想像力の単一性を「機械的な知性」として退け、丁度 Blake が「一粒の砂に一つの世界を見、一時間の中に永遠をつかんだ」ように、Swinburne は、ものを見るには、固定的で常識的な見方以上のものがあることを主張しているのである。この彼の詩学は、既に述べたように、因襲的な伝統を固持する社会の道徳や価値観や、絶対的な宗教の優越性に疑問を投げかけ、時には反逆的な態度を取ることになる彼の世界観と通じるものであろう。

IV

Swinburne にとって「魂」は自由をも意味する。その自由とは、政治的自由、宗教的自由、芸術的自由、要するに絶対的な自由なのである。

The earth-god Freedom, the lovely
　Face lightening, the footprint unshod,
Nor as one man crucified only
　Nor scourged with but one life's rod;
The soul that is substance of nations,
Reincarnate with fresh generations;
　The great god Man, which is God.[26]

「魂」は、「人類の本質」であり、それは「生命の火」と同じく、世代から世代へと永劫に受け継がれるものであり、たとえ肉体は滅んでもその精神は生き続けるのである。Apollo が光の神であると同時に芸術の神であるように、Swinburne にとって、「魂」は、「二重の想像力」を有する詩人

に霊感を吹き込むまぶしい光であると同時に詩の源であった。このような霊感を 'epiphany' と呼ぶこともできるだろうが、それは瞬間にひらめくものであり、これを合理的理性で長く留めて分析することはできない。このように考える点においても Swinburne はロマン派の流れを汲む詩人であった。彼が力説する「魂」とは、要するに、詩人の心に輝いている Apollo なのである。

「魂」は、「永遠の生命の永続的な炎」である故に、「時」や「最も強力な記憶」に勝るものである。

> The spear that pierces even the sevenfold shields
> Of mightiest Memory, mother of all songs made,
> And wastes all songs as roseleaves kissed and frayed
> As here the harvest of the foam-flowered fields;
> But thine [Sappho's] the spear may waste not that he wields
> Since first the God whose soul is man's live breath,
> The sun whose face hath our sun's face for shade,
> Put all the light of life and love and death
> Too strong for life, but not for love too strong,
> Where pain makes peace with pleasure in thy song,
> And in thine heart, where love and song make strife,
> Fire everlasting of eternal life.(27)

これまでの長い歳月の間に、多くの人間が、喜びや悲しみやさまざまな状況の下で生き、そして死んでいった。しかし、「魂」を持つ芸術は、Sappho の不滅の歌のように、世代から世代へと受け継がれてゆくものである。実際、「魂」は、過去から未来に至るまでの人と人とを結びつける絆であり、それは、芸術家が人類と共感的にかかわり合い、彼の創造的想像力によって生じるものである。「二重の想像力」を持つ詩人の務めは、内奥の「魂」から生じる創造的想像力をもって歌うことに他ならない。そして、世界がどのような暗黒の相を呈していようとも、その「魂」が偽りのいかなるものに対しても恐れることがないならば、そう絶望的になることはないと詩

人は言う。

> But well shall it be with us ever
> Who drive through the darkness here,
> If the soul that we live by never,
> For aught that a lie saith, fear.[28]

"Félise" や "Hymn to Proserpine" 等いくつかの詩では、詩人はかなり pessimistic な雰囲気を持っているように見えるが、それで彼を pessimist だとするのはいささか早計であろう。確かに Swinburne の作品、特に、*Poems and Ballads* 第1集 (1866年) に収められた作品には、ラファエル前派の審美主義から、いわゆる、*fin de siècle* に到る decadence の要素も見られなくもない。しかし、彼にとっての *l'art pour l'art* とは、その言葉から一般的に連想されがちな、人間不在の高踏な世界に遊ぶ「芸術のための芸術」ではなく、既に述べたように 'divinity' と 'humanity' を合わせ持ち、人間に深く共感的にかかわるものであったはずである。

彼が *Atalanta in Calydon* や *Tristram of Lyonesse* や *The Tale of Balen* のような作品を書いたのは、厭わしい現実の世界から、過去の、或いは伝説上の世界へ逃避するためだけではなかった。Swinburne は Meleager や Tristram や Balen の中に、永遠の生を生きる完全な型(タイプ)を創造しようとする意図を持って、これらのテーマを選んだはずである。これらの主人公は、いずれも悲劇的な最期を遂げるが、それだからこそ、彼らは芸術の中で永遠の生を獲得することができるのである。

実際、Swinburne の詩に見られる世界は、しばしば悲劇的で悲惨に見えることが多いが、これは彼が pessimist であったからというよりも、むしろ、彼が、人間の生活を常に脅かしている「時」という破壊の力の底流をいつも意識していたからであろう。彼には、破壊作用も世界の一つの相であり、それは「変化という不変の調べ」の一つなのである。無情な「時」という波に対抗できるのは不滅の「魂」だけなのであり、その不滅の「魂」を持

つ人々だけが絶対的な自由を勝ち得るのであり、そのような芸術家の一人たらんとして、Swinburne は時空を超えてさまざまな人々を結びつける「自由と不滅の魂」の意義を歌ったのである。

注

引用した詩句は *Swinburne's Collected Poetical Works* (London: William Heinemann Ltd., 1924) に拠った。

(1) R. V. Johnson, *Aestheticism* (London: Methuen & Co. Ltd., 1969), pp. 58-59. 及び、Mario Praz, *The Romantic Agony* tr. by Angus Davidson (London: Oxford University Press, 1970), p. 27 参照。
(2) "Before a Crucifix", ll. 39-42.
(3) "Hymn to Proserpine", ll. 68-70.
(4) "Félise", ll. 283-285.
(5) "The Last Oracle", ll. 57-60 参照。
(6) The Marquis de Sade, *Juliette* tr. by Austryn Wainhouse (New York: Grove Press, 1968), pp. 39-40.
(7) Praz, *op. cit.*, p. 104.
(8) 1865年7月14日(?)付 Lord Houghton 宛の手紙、*The Swinburne Letters* ed. by Cecil Y. Lang (New Haven: Yale University Press, 1959-62), vol. 1, p. 125参照。
(9) *Atalanta in Calydon*, ll. 465-468.
(10) *Ibid.*, ll. 1151 and 1192.
(11) Gilbert Lely, *Sade: Etude sur sa vie et sur son œuvre* (Editions Gallimard, 1967), pp. 201-202. (澁澤龍彦訳、『サド侯爵』、筑摩書房、1970、p. 185.)
(12) 1862年8月18日付 Richard Monckton Milnes (後の Lord Houghton) 宛の手紙、*The Swinburne Letters*, vol. 1. p. 57 参照。
(13) "The Altar of Righteousness", ll. 49-54.
(14) *Tristram of Lyonesse*, IX, "The Sailing of the Swan", ll. 1-12.
(15) Lafcadio Hearn, "Studies in Swinburne", included in *On Poets* (Tokyo: The Hokuseido Press, 1941), pp. 123-124.
(16) "Hertha", ll. 136-140.
(17) "A Nympholept", ll. 120-126.

(18) *Tristram of Lyonesse*, III, "Tristram in Brittany", ll. 167-180.

(19) *Ibid.*, IX, "The Sailing of the Swan", ll. 67-76.

(20) "On the Cliffs", ll. 90-103 参照。

(21) *Ibid.*, ll. 132-135.

(22) Meredith B. Raymond, *Swinburne's Poetics : Theory and Practice* (The Hague: Mouton, 1971), pp. 111-112 参照。

(23) A. C. Swinburne, "George Chapman", included in *The Complete Works of A. C. Swinburne* ed. by Edmund Gosse and T. J. Wise (London: Heinemann, 1925-1927), vol. 12, p. 241.

(24) A. C. Swinburne, *William Blake, a Critical Essay* ed. by Hugh J. Luke (Lincoln: University of Nebraska Press, 1970), pp. 41-42.

(25) *Ibid.*, p. 155.

(26) "To Walt Whitman in America", ll. 113-119.

(27) "On the Cliffs", ll. 423-434.

(28) "The Lake of Gaube", ll. 67-70.

（大学院学生）